

中村素堂

春のやわらかい陽ざしが、ものの音もしないような静けさで、二月堂と路ひとつ隔てた法華堂の板戸や白い壁に映っている。

二月堂はお詣りの多い観音さまであるのに、この通称三月堂という法華堂の不空絹索さまは、観光客の少ない時は実に静かで、あの半眼の月光菩薩のお顔が閑寂をひときわ深めているようにさえ見られるのである。

西側の方が、たしか人の通る広庭に面しているので、夕陽が軒深くさし込む時分に、あの天平創建のお堂の中に入ると、仏さまのお顔も片明りがして、遠い遠い時代の人々の信仰の心に触れるものを感じる。私はこんな時分にあのお堂の西側の柱に刻まれた、今から八百年も前の人の、そうせずにはいられなかつた落書きに見入り、西陽に温まつた古い柱に手をふれてしみじみと感慨にふけつたことがあった。

長承何年、仁治何年などという八百年ほど前のものが三つか四つあったが、

保延元年八月廿三日千日満但結願九月十二日畢

と書いてあったのが、今でも最も心に残っている。崇徳天皇さま、近衛天皇さまの時分に流行したひとつの信仰の形であつたと思われるが、千日花といつて約三年間毎日仏さまに花を捧げてお詣りをする、お詣りの満了に達した日、三年間も心にかけて通つたのが、今日やつとそのお誓いを果たしたという。信仰を持つものでなければ判らない深い深い感激が、しぜんにこのお堂の柱にこんな言葉を記しておきたくなつたのではないであらうか。

これは女性かしら、それとも善い男であつたらうか、などと想像をたくましくしつつ、この字に手をふれているうちに、知らず識らず

ずその誓い人の清らかな喜びが判るような気がして、眼がしらの熱くなることであつた。

だから私は、この文字はどうも落書きというのには、少し勿体ないと思つている。そしてその書風も時代の風が匂つて、そんなにも描いてではないのである。

また昨年落慶の式が盛大に行われて、旧観に復した宇治の平等院にも、正面の丈の高い扉。この世ながらの極楽の美しさとと名匠を頼んで描かせた九品往生の絵の扉も、手のとどくところ一面の落書きである。その落書きの中にもよく見ると、遠い他国から遍歴して来た人の生国や生まれ年を記したものなどが、愚かないはずら書きの中に混つて、消えそうになりながら、ほのほのとしたものをただよわせていた。

このことを書いてみると、よほど前のある秋に信州の方に遊んで、上田の別所温泉に国宝の安楽寺の塔を訪ねた時のことが思い出される。

この寺の八角三層、裳階のついた珍しい塔へ登って行く手前に、鉄眼版の一切経を入れた白い一棟の土蔵があつた。土塗りの扉も大分傷んでいたが、この白い壁や扉にも掻いたような落書き、矢立の墨でしたるものなどいくつかの落書きがあつた。

ふるてらの はしらのこる たびびとの なをよみゆけど
しるひともなし

秋草道人のこんな歌は、まさにこんな時のことであらう。今どきのYM生などという落書きとともに、百年もあるいはもつと古いかとも見られる落書きも、ともにこの壁に消え残つていて、そのあまりにも遠い土地から廻国して来て同行二人としてある字などに出あつて、書いた人の姿に想到すると、何かおのずから合掌でもしてあげたくさなつたものである。(つづく)

〔筆間雜記〕中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。(一)天法輪(昭和四十年)